

SEMINAIRE OUVERT 2003

Journal Mensuel Gratuit

No.2-21

22 fevrier 2003

月刊
セミナー通信
二〇〇三
第二号

SÉMINAIRE OUVERT 2003

FUJITA, Hiroshi (psychiatre - psychanalyste)

3^{ème} SÉMINAIRE (en japonais, sans interprète)

公開セミナー2003 『心的構造論』

藤田博史 (精神分析医)

第3回第3講

「可能世界としての心的構造—様相論理・量子論理的心的構造について」

samedi 22 mars 2003 - - 13h30-16h30

SALLE #501 DE LA MAISON FRANCO-JAPONAISE)

2003年3月22日(土) 13:30 ~ 16:30 (開場時間も13:30になります)

会場: 日仏会館 501号室

LA MAISON FRANCO-JAPONAISE

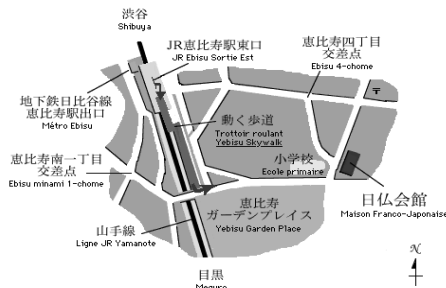
Tél. 03-5421-7641

10 min. à pied depuis la Sortie Est de la Gare d'Ebisu
(ligne JR Yamanote)

日仏会館 東京都渋谷区恵比寿3-9-25

Tel : 03-5424-1141 (日本語)

JR恵比寿駅東口から「動く歩道」経由で徒歩約10分



Frais de participation : 1000 yen

聴講料 : 1000円

Organisation: L'EUROCLINIQUE 主催: EUROCLINIQUE

Collaboration: DOLL FORUM JAPAN 協賛: DOLL FORUM JAPAN

Renseignements: BUREAU CULTUREL DE L'EUROCLINIQUE

問合せ先: ユーロクリニック 文化部

Tél. 042-308-7637 (担当: 榊山) E-mail : ys@euroclinique.com

発行
EUROCLINIQUE

編集
ユーロクリニック文化部

目次

公開セミナー案内	1	「ブレーキを踏もう」 佐藤良平	6
「セミナー断章」	2.3.4	公開セミナー、フジタゼミ予告	7
「ビブリオフィリア逍遙遊」 伊藤敬	5		

SÉMINAIRE OUVERT 2003

公開セミナー2003

「心的構造論」

セミナー断章 講義 藤田博史

榊山裕子 編

Le 1er SÉMINAIRE 第1回第1講「心的構造とはなにか？」

samedi 11 janvier 2003 (SALLE#501 DE LA MAISON FRANCO-JAPONAISE)

2003年1月11日(土) 13:30 - 16:30 日仏会館501号室

対のシニフィアン

人間の言語を構造化している一つ一つの記号というのはそれぞれが「シニフィアン」「シニフィエ」でなり立っているというのが一般言語学講義の考え方だったのですが、現代の精神分析、特にラカン派の精神分析においては、記号すらも2つのシニフィアンの対に過ぎない。これを「significant binaire 対のシニフィアン」という。対になっている。1つの「signe シーニュ」というのは実は「significant binaire 対のシニフィアン」に過ぎない。つまりある言葉によって「意味されているもの」と思っていることは、実はそれがまた「シニフィアン」になり得るのです。

つまりわれわれが「シニフィエ」だと思っているものすら「シニフィアン」なのだということ、この視点が非常に重要なのです。人間の言語というのは、語られるもの、書かれるもの全て「シニフィアン」のみでできている、ということが重要なのです。つまり人間の精神だとか、「もの」そのものだとか、そういう地平には永遠に降りていくことが出来ないという運命を背負っているわけです。つまり言葉に依存して生きていかざるを得ない人間は、永遠に「もの」そのものとか、感情そのものとか、身体そのものとか、そういうところへ着地することが出来ないのです。常にその「シニフィアン」のレベルでどんどん先送りされ続けているということです。

FORT - DA

特に生後6～18ヶ月のこの時期です。「いないいないばー」とか、鏡を見て非常に喜ぶとか、こういう時期がある。こういう時期を経た後で、言葉が出てくる。

フロイトはここに注目したわけです。もうご存じの人もいます。「快感原則の彼岸」のなかで、生後1年半の男の子がお母さんがいなくなってひとりで遊んでいる。お母さんがいない間、ベッドの下に糸巻きを投げて、「いた」とか「いない」とか言って一人で遊んでいるのをフロイトが目撃するのです。ドイツ語で「いない」は「Fort」、「Da」は「いた」、「Fort-Da」「いないーいた」。

「いるーいない」つまり「在と不在」、母親の「在」と「不在」を発声によって、つまり音によって置き換えているその現場です。実際の母親が「いる」とか「いない」というのを、[o]とか[a]という音素の対立によって切り出している。つまり世界を作り出している現場である、とフロイトは考えたのです。

音素の対立

おそらくこれはある音素の対立です。つまり音素の対立というのは何かというと「シニフィアン」です。母の不在が、最初にあるシニフィアンで置き換えられたということです。ここにまたあらためて書くと、最初のシニフィアンですから「S1」といいいます。母親がいないですから、ここがちぎれている。「S1」をふたしなと壊れてしまうわけです。

ところが子供が本当に求めているのはこんな「Fort」とか「Da」とかいうものではない。母親のおっぱいであろうし、母親の声であろうし、母親のぬくもりであろうし。別のものをつかまされているわけです。で、「これじゃない」。次のシニフィアンを掴まざるを得ない。次のシニフィアン、次のシニフィアン、こうしてどんどんシニフィアンが子によって掴まれていく。母の不在を補うべく、どんどんシニフィアンを掴み続けるのだけれども、結局シニフィアンはシニフィアンですから母親ではない。S1、S2、S3、こういう一連の「連鎖」が始まるわけです。これが言語の習得です。

シニフィアンの連鎖

一つの理論的な連鎖に注目してみれば、われわれはいまやめくるめく「シニフィアンの連鎖」のなかに生きているといえるでしょう。色々なことをわれわれは知っています。色々なものの名前も言えるし、ある程度のシニフィアンを使いながら思考をすることもできるけれども、そのもとをずっと辿っていけば、一番最初に掴んだシニフィアンがあるはずなのです。これは論理的な要請です。これが何かに置き換わることによって、この横棒は実は、こう読み替えてもよいのです。「抑圧の横棒」。だから本当はこの下にあるわけです。何があるかということ「母の不在」。つまりもともと「母の不在」があって、その上にS1がのり、その上にS2がのるというようにして、論理的に辿っていくとその一番もとには「S1」がある。

ここで気がつくことは、この分数の形です。2つとれば分数の形になっていますけれども、2以降のシニフィアンは、「シニフィエ」にも「シニフィアン」にもなり得るのです。つまりこの分数に注目すれば、S2はS1のシニフィアンです。ところがもう1個、S3がのってくると、S2はS3のシニフィエになっている。そういう形でどんどん行きますけれども、このS1だけは「シニフィアン」になれない。なぜかということこの手前がないからです。つまり論理学的な要請として、S1だけ特別の場所にあるわけです。つまりシニフィアンになれない。ですから矛盾しているわけです。シニフィアンでありながら、シニフィアンになれない。

これは非常に重要な概念です。つまり「シニフィアンでありながら、シニフィアンになれない」というのは、言葉でありながらどの辞書を探してもその辞書のなかに書いていないというようなことです。言ってみれば、われわれが発音したいのだけれども、その「シニフィアン」があるということは予測されるのだけれども、決してわれわれが口に出して言えないような、われわれが発音することができないような「シニフィアン」。一番最初に身体のかなかに閉じ込められた「シニフィアン」です。

こうやってS2、S3、S4と構築されていったシニフィアンのめくるめく連鎖の一番根っここのところに位置しているこの「シニフィアン」というのは、全てのシニフィアンに対して特権的な位置にあるのです。つまりこのS1がなくなったら全てこけてしまうわけです。2以降のシニフィアンが全てこけてしまう。

このS1が、全てのシニフィアンに対して「シニフィエ」の位置を占めている。つまり全てのシニフィアンに対して、その全てのシニフィアンに共通な意味の「意味されるもの」の場所を占めている。

これが非常に重要なことなのです。ほとんど無数に積み重なったと言えるようなシニフィアンの根っこにあるシニフィアンこそが、無数に積み重なったシニフィアンに対して、「シニフィエ」、いわゆる「意味されたもの」の位置を占めているのです。

シニフィアンと排除されたもの

通常の発達段階でいよいよ最初のシニフィアンを掴む時、鏡像段階に差し掛かった生後6ヵ月から18ヵ月の間で最初のシニフィアンを掴むぞ、という時に、最初のシニフィアンを掴まないまま、正確にいうとその最初のシニフィアンは自分の身体の別の場所に格納したまま、2番目のシニフィアンをそこへのせてしまうという人たちがいます。つまりおそらくそこには「シニフィアン」ではなくて、ある種の感情の固まりとか、あるいはエネルギー的なもの、そういうものが「シニフィアン」の代わりにそこに陣取っているのではないかと思われるのですけれども、その身体の別の場所に格納されたもののことを「排除されたもの」と精神分析では呼んでいるのです。

この「空の場所」に対して、身体のどこかに、この「シニフィアンの連鎖」とはまったく別の場所に「排除されたもの forclos」がある。「排除されたもの」がずっと存続し続けているわけです。

そして一定の年齢、ずっと模倣しているうちはいいけれど、模倣ができなくなる時期があるのです。小学校の頃なんかは大好きな友だちの真似ばかりしているけれど、だんだん思春期になると、「わたしっていったい何」という疑問が湧いてきたり、自我が肥大してきます。だからここで世界の意味をもう一回問い直してみたりする多感な時期に差し掛かってくると、自分のこの場所が空席だったことがわかってしまう。そして「世界没落体験」。だいたい精神分裂病が最初に顕在化するのは、中学校2年が一番多いという中井久夫という精神病理学者の考察があります。中2と高2で多発するというのですね。

朝起きたら世界が壊れそう。お母さんの顔をした人がのぼってくるけれども、この人はお母さんではない。つまり世界の意味が全て、その意味を支えていたものがなくなってしまったわけですから、世界の全ての意味がなくなってしまう。つまり世界が崩壊する。

それが一定の時間続いた後なくなるのは、この「排除されていたもの」がこの空の場所に戻ってくる。フランス語で「retour」という。戻ってくる。つまり身体のどこかに格納されていたものが、もう今にも精神が崩壊せんとするその時に戻ってきて助けてくれるのですね。ここに嵌る。

ところが、順序が逆ですよ。これが最初に来て、その上に積み重なることで世界が構築されてきたのに、これは既にあらかじめ構築された世界のなかへ隠喩の核の部分に嵌ってくる訳です、後から。何が起こるかということ、こういう「forclos」が嵌ってくる事で、今まで構築されている世界の意味が全部変わってしまう、全部書き換えられてしまう。一気に。それが「妄想」か「幻覚」と呼ばれているものです。つまり「forclos」によって、「回帰してきたもの」によって、自分の精神という構築物は、その隠喩の核の部分から再構築されてしまう。ジャック・デリダの言葉を使えば「デコンストラクション déconstrucion」です。今までの精神が、解体され、同時に再構築される。つまり「解体構築」です。

ビブリオフィリア逍遥遊(1) ガイドブック考

伊藤 敬

フランスの本について思いつくままに何回か書いてほしいという注文であるが、逸脱こそわが命という方針で行き当たりばったりでペンを進めてみよう。

旧文部省が音頭を取った教育内容のリストラのおかげで、第二外国語を必修とする大学が少なくなった十年ほど前から、日本のフランス語、ドイツ語関係の洋書店は、おしなべて、少しずつ元気を失ってきたような印象がある。わたしは数年前まで、西新宿の某洋書店から毎月送られてくるカタログをみて、毎回数万円程度の発注をしていたものの、仕入担当が替わったのか、いつの頃からかカタログに面白そうな本がほとんど載らなくなって来たので、注文を出すことも稀になってしまった。丸善、紀伊国屋のたぐいは、独仏の本の店売りは、はじめから投げています。日本でフランスやドイツの本を、店頭で実物を手にとって買うとなると、神田のT書店の二階か、京都の至誠堂あたりがおすすめということになりそうだが、一軒だけでは、ある程度めばしいものを手に入れると、しばらくは食指を動かされるようなものは見られなくなるし、さりとて本を買うだけのために、そうそう京都まで足を伸ばすわけにも行かない。その一方、昨今は、時期を選べば、往復のヒコキ代と朝食つきの宿代を合わせて、しめて十数万円で一週間ばかりパリに行ってくる事ができるのだ。

そんなこともあって、わたしは数年前から、職場の休暇を利用して、一週間ほどパリに本の買出しに出かけるようになった。パリの五区か六区の宿に滞在して、昼は本屋と美術館を回り、夜は現地で切符が手に入る範囲でオペラやコンサートを覗く毎日である。

成田を午後十時少し前にエールフランスで発つと現地には早朝に着く。メトロでパリ市内に移動して、北駅の売店で「ぴあ」のフランス版「パリスコープ」を買ってから、宿に荷物を預け、近くのカフェに入ってから、おもむろに、これからの行動計画を練るというわけである。なにせ、こちらには、T書店二階と同じような品揃えの店が、数十軒はあるのだ。宝の山を目の前にして、心は躍り出さんばかりである。

十年ほど前にはじめてフランスを訪れた際は、澁澤龍彦の「滞欧日記」(現河出文庫)が参考になるかなと漠然と考えていたが、これはガイドブックとしては、まったく用をなさない。澁澤氏がフランスを訪れたのは二十数年から三十年数年前で、それから街の様子は大きく変わっているし、店の名前などもそれほど出てはこない。これは、あくまでも澁澤氏のエッセイに準じる「作品」として読むべきものである。

かりにパリで古本屋を回ることだけを目的と考えるならば、鹿島茂の「子供より古書が大事と思いたい」(文春文庫)がきわめつきの名著である。この本と

Guide des librairies d'ancien et d'occasion (Ides et Calendes)というフランスの古本屋ガイドとポケット版のパリ地図帖を携えてパリを歩き回ると、一週間も経たないうちに、ある種の土地カンといったものが出来てくる。ただし、このやり方は、ある程度フランス語の出来る本好きを、蟻地獄か底なし沼に追い込むようなところもあって、万人にお勧めできるものではない。気がつくとき引き返すことが出来なくなってしまうという意味で、本好きには、近づかないが賢明な悪書と言うべきかもしれない。

土地カンのある人の編集によるガイドブックとなると、やはりミシュランのガイドが最高であろう。日本語版は、残念なことに絶版となってしまったが、このガイドの示すコースのとおり歩くならば、たとえば、ピガールのフーズク街を、ほとんど危険な目にあうことなく、その街特有のある種のいかがわしい雰囲気のみをじかに味わって、無事に帰ってくることさえできるのだ。もっとも、道を一本間違えたり、ポン引きと然るべく交渉をはじめられた場合の結果については、保証の限りではない。

現在、日本で最も普及しているガイドブックは、やはり「地球の歩き方」シリーズということになるであろう。国によっては改訂のペースが極端に遅かったり、投稿者の主観的な文章が検証なしに掲載されていたりするという場合はあるし、この本に名前が出ると、数年のうちにそのレストランの味が落ちるというのも事実で、必ずしも全面的に信頼できるわけではない。しかし、鉄道や郵便などといった公共機関の事情の変化や、美術館、博物館の休館日の変更などについては、正確なフォローがしてあるので、最新版を旅行カバンに入れて持っていくだけの価値はある。

さて、個人旅行で海外に出かける場合には、食事をどうするかという問題がある。この点に関しては、「地球の歩き方」シリーズは先に述べた理由でお勧めできない。ある程度慣れてしまえば、店頭の黒板にチョークで定食のメニューを書いているような店に飛び込むのが一番であるが、初心者には、どんな店がよいかという見当も、なかなかつきかねるところがある。そんな方にお勧めなのは、稲葉由紀子さんの「パリでお昼ごはん」(TBSブリタニカ)である。初版は1997年で、その数年前からの雑誌連載記事をまとめた、かの地における「B級グルメガイド」である。たしかに、現在ではメニューの値段は3割方上がっているし、掲載されたところも、数軒は店をたたんでしまっているが、ここに紹介されている店を何軒かハシゴすれば、安くて美味しい店の選び方は、なんとなく体得できるのである。なお、昨年春、同じ著者により、同じ版元から「新・パリでお昼ごはん」という本が出たらしいが、こちらは未見である。

さて、こんな具合にはじめて「逍遥遊」、どんなところにたどり着くことやら？

ブレーキを踏もう

佐藤良平

連載第0回

スピードが速すぎます

貴重な誌面を借りて連載を始めるにあたり、私自身の立場と、これから何を書いていくのかについて簡明に述べておきたいので、しばらくつき合いたい。

私はフリーランスの文筆業者で、今年39歳になる。都内に住み、独身。興味の中心は、音楽、映画、マンガを含む書物など。音楽 / 映像ソフトの紹介を主な仕事としている。

この連載では、そうしたメディアをめぐる話題を扱っていく。しかしながら、この連載の目的は個々の作品に対して批評を行うことではない。そうしたメディアや作品と、それらを受容するユーザの間にある関係、いわば「受容のあり方」を通じて、メディアおよびユーザの実態を解明しようというのが私の目論見だ。

作品というのは批評の対象として固定された存在である。重要なのは、仮想的な大空間の内部に作品が固定されており、批評の主体である私たちがその空間内を漂流しているという事実だ。ある作品を批評するという行為は、その作品と己との間にある距離を測ることに他ならない。しかし、とすれば批評する側の人間は自分こそが固定された存在であると思ひ込み、「作品が自分の周囲を漂っている」とする、天動説にも似た主客転倒の誤解に陥りがちである。原則として作品は一瞬後も形を変えないが、人間が一瞬後に何を考えるか不確定である以上、批評の主体が固定された状態であるとは到底言えないだろう。

私が興味を感じるのは、作品と自分を隔てる距離ではなく、自分を含めたユーザ一人ひとりが作品とどのような関係を結ぶのか、より良い関係を結ぶにはどうしたら良いのか、といった事柄だ。作品とユーザの間にある関係はそう簡単に変わらないと、長年にわたって信じられてきた。しかし現在、その関係がものすごい勢いで変わろうとしている。

これから私が状況を語る時に多用するであろうキーワード一つ、あらかじめ挙げておこう。それは「ブレーキを踏む」という言葉だ。かつてイヴァン・イリイチは「プラグを抜く(unplug)」という過激なキーワードを掲げて現代文明のあり方を批判した。私は穏健な人間なので、イリイチの考えには及び腰で同意を示しつつも、何の前触れもなく突然プラグを抜くのは危険であり、場合によっては不必要なクラッシュ(衝突)を惹起する可能性すらあると疑っている。そこで、まずはブレーキを踏んで徐々にスピードを落とし、本来あるべき速度までスロウダウンする方が現実的ではないかと考えているのだ。

すべての人の足元には等しく3つのペダルがある。しかし、アクセルとクラッチの二つは踏んだことがあっても、第3のペダルは今まで一度も踏んだことがない。ペダルの機能は何であるか教えてもらったことも自分で考えたこともなく、名前すら知らないという人が多いのではなからうか？ 私たちはまず自分の足元にもブレーキがあることを自覚し、次にどうやってら上手にブレーキを踏めるのか学んでいく必要がある。

東京オリンピックの年に生まれた私は、今に至るも人々が自ら望んでブレーキを踏むのを目撃したことが殆どない。人として生まれたからには、自分が与えられたアクセルを踏むことだけが唯一絶対の美德であり、その常識に疑念を抱く者は正気を疑われても文句を言えなかったのである。社会とは「どこまで自分のアクセルを踏み込めるか」を競争すべき場であって、人は常に自分の限界までエンジンの回転数を上げるよう求められてきた。「アクセルを踏め」という無言の強制力は私の周囲だけに限定されたものではなく、きわめて普遍的だ。産業革命、植民地の獲得、アメリカ西部の開拓。これらすべてはアクセルを踏み続けることで達成された。大恐慌に臨んでルーズヴェルトがブチ上げた「恐怖に対する恐怖の克服」は、専らアクセルを踏むことによるのみ実現可能だったのである。

私が考えるに、とりわけアメリカ人という人種はブレーキを踏むのが苦手だ。というより、彼らはブレーキを踏むことに対して本能的な恐怖感を持っているのではないかとさえ思える。アメリカが牽引した経済発展が世界を覆ったのに続いて、今やアメリカの正義が世界の正義となった。そこで自然とアメリカ的なアクセルの踏み方に対して私が批判を行うケースが多くなるだろう。好んで政治を語るのが私の目的ではないが、だからこそ政治が話題に上ることも予想される。それを妨げる理由は、さしあたって見当たらない。

とにかく私はブレーキを踏んでみた。今後も、さまざまな場で機会を捉えてはブレーキを踏みまくる所存だ。自分の人生を丸ごと突っ込んで生体実験をやっている気分である。幸いなことに、世の中には私以外にもブレーキを踏む人が増えてきているようだ。アクセルを踏むだけが人生なのではない。明らかにアクセルを踏むのに向かない人もいる。周囲のスピードに合わせられないというだけの理由で、頭がおかしなったり暴力を振るったり電車に飛び込んだりするとなら、そんなのは馬鹿げている。大げさに言えば、ブレーキを踏むことで明るい未来がやって来るのだし、それしか希望は無いと私は信じている。

実のところ、私自身もブレーキの踏み方を熟知しているとは言えない。ブレーキを踏むことにかけては、私たちは皆そろって初心者なのだ。是非ここで言うておきたいのだが、ブレーキを踏むのは決して恐いことではなくむしろ楽しい。その楽しさは、踏んでみればすぐに分かる。どこまでブレーキを踏めるか競争するのは愚かな業だが、当面はグイグイ踏み続けても大丈夫だと思う。それほどまでに私たちのスピードは速すぎたのである。

ブレーキを踏んだ者である私は、アクセルを踏み続ける世界の所産であるメディアをどのように見ているのか？ それを次回以降に書いていくつもりだ。どうぞよろしく。

SÉMINAIRE OUVERT 2003 公開セミナー2003『心的構造論』

Le 4ème SÉMINAIRE

FUJITA, Hiroshi (psychiatre - psychanalyste)

samedi 26 avril 2003, 13h30-16h30

SALLE #501 DE LA MAISON FRANCO-JAPONAISE

第4回第4講

「可能世界としての心的構造—様相論理・量子論理的心的構造について(その2)」
藤田博史(精神分析医)

2003年4月26日(土) 13:30 ~ 16:30 (開場時間も13:30になります)

会場: 日仏会館 501号室

Frais de participation: 1000yen 聴講料: 1000円

Organisation: L'EUROCLINIQUE Collaboration: DOLL FORUM JAPAN

Renseignements: BUREAU CULTUREL DE L'EUROCLINIQUE

Tél.042-308-7637 E-mail:ys@euroclinique.com

主催: EUROCLINIQUE 協賛: DOLL FORUM JAPAN

問合せ先: ユーロクリニック文化部

Tel.042-308-7637 E-mail:ys@euroclinique.com

SÉMINAIRE PRIVÉ 通称「フジタゼミ」

藤田博史によるプライベートゼミ、通称「フジタゼミ」が、原則として毎週木曜日に行われています。自由発表の場トピカ、仏語原書講読(現在はジャック・ラカンの未公開セミナー「ル・サントム LE SINTHOME」の講読)などを行っています。語学力は問いません。ご興味のある方の自由な参加をお待ちしています。今後の予定は随時「藤田博史の公式サイト」に掲載されます。サイトアドレスは

<http://www.fujita.com>です。

なお、インターネットをご利用でない方は、ユーロクリニック文化部まで電話でお問合せください。

今後の「フジタゼミ」の予定

■第35回フジタゼミ 2003年3月6日(木) 19:00 ~ 22:00
備屋珈琲店恵比寿店会議室(恵比寿) Tel:03-5488-1651

■第36回フジタゼミ 2003年3月13日(木) 19:00 ~ 22:00
喫茶古炉奈会議室(秋葉原) Tel:03-3251-5359

■第37回フジタゼミ 2003年3月20日(木) 19:00 ~ 22:00
備屋珈琲店恵比寿店会議室(恵比寿)

■第38回フジタゼミ 2003年3月27日(木) 19:00 ~ 22:00
喫茶古炉奈会議室(秋葉原)

■予定は変更されることがあります

公開セミナーは月1回(原則として第4土曜日)開催されます。

『セミナー通信 2003』もそれにあわせて、原則として月1回発行されます。

この公開セミナーは、興味のある方はどなたでも参加できます。

SÉMINAIRE OUVERT 2003 Journal Mensuel Gratuit No.2-21

月刊『セミナー通信 2003』フリーペーパー版 2-21号

2003年2月23日

発行 EUROCLINIQUE

編集 ユーロクリニック文化部 榊山裕子

Tel.042-308-7637 E-mail:ys@euroclinique.com

メールマガジン版もあります。E-mail:seminaire@mac.com までお申込みください。